福島県現代俳句協会会報

第14号　2023年・春
編集　福島県現代俳句協会会報編集部　春日　石疼
福島市八木田神明十三の八　090（6220）4757

令和5年度・県現俳総会
顔を合わせての開催へ
4月9日(日)予定

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で「紙面決議」となっていた福島県現代俳協会の総会ですが、来年度は会員の皆さんが一堂に会して討議・決議できるように準備を進めていきます。

4月9日（日）、福島市三河町「コラッセふくしま」（福島駅西口徒歩5分）を会場に、午後1時半受付開始、2時から総会、3時から通信句会の結果発表と合評会を開催し、4時過ぎには終了予定です。来年度は通常の活動に加えて役員改選の年でもあり、また現代俳句東北大会の福島主管の年でもあります。多くの会員のご参加をお待ちしています。

なお、新型コロナ感染症の流行状況によっては昨年同様の書面決議となることも考えられますので、その際は改めてご連絡し、議案書・賛否のハガキを郵送いたします。

県現俳「通信句会」に
皆さんの一句を！

今年度を終えるにあたって、昨年度同様「通信句会」を開催します。

会報14号に同封されているハガキに、あなたの未発表作品を一句お書きいただきご応募ください。後日皆さんの作品を郵送しますので、会員全員に一句互選していただきます。投句の締め切りは2月末日となります。昨年は県会員40人中34人の方が投句され、紙面での会員交流をはかることが出来ました。

なお選句結果は4月9日の総会終了後、同会場で発表し、合評してお互いに研鑽しあいたいと予定しています。リアル総会が中止の際は郵送にて結果をお知らせいたします。

●「現俳本部未加入」で「県現俳のみ加入」の皆さんへ。現代俳句協会が一般社団法人に移行する運びとなります。地区協会は現状の任意団体のままですが、これを機に本部にも加入されることをお勧めします。

現代俳句東北大会
9月17日（日）開催

福島市のコラッセふくしま（福島駅西口すぐ）を会場に、福島主管での開催です。
会員の皆様のご協力をお願い致します。
当日講演は神野紗希先生による「生きた俳句、生きていく俳句」。懇親会も予定です。

会員作品7句

うつほび

斎藤　秀雄（鏡石・吟遊・We）

娘たち越しの射禱を逆ディスコ
着の儘に羊の窓がパレルゴン
父よクロノスの計算機を孕め
あめふらし動詞て凝固する波止場
姉衣ほどき玉虫のさまよひのけしき
虚火に家族がみえてくる千年
青仏を牧しみな弧の棒レンズ

花林糖

藤巻　淳（福島）

熊突や鼈甲色の眼鏡かけ
虎落笛半地下届く警報音
鼬またEEZ越えてくる
白鳥はキーウの空に留まりて
鼬去る殺処分の鶏咥え
冬帽子刑務所脇の六地蔵
数へ日の名残惜しまず花林糖

つらつら椿

唯木　イツ子（福島・小熊座）

雨だけど夕暮だけど藪椿
つらつら椿女ばかりの宴あり
「微分積分」の黒板消せず卒業す
三月十一日の骨捜す海
春疾風「安売り」の旗はためかす
生きてる途中退屈もあり花八ツ手
牛蒡引く親子と吾妻小富士かな

トラのやつ

鵜川　伸二（郡山・海原）

散歩みちあんぽ用柿へんちくりん
目正月どでか冬瓜ワンコイン
深層は泡立草のみ交差点
柚子づくし湯に晩酌に娘のハート
白鳥来身の寄せ合へる一枚田
狂ひ咲一目忍ばず憚らず
すきま風ちやつかり朝寝トラのやつ

待春

鈴木　亜由美（三春・桔槔）

空薄く青く膨らみ白鳥来
篁に生まれし風や今朝の冬
冬夕焼飛行機雲の彼方より
雪明かりして釣り人の背のいくつ
鼬毛の筆先揃ふ鬼房忌
侘助や大風も跳ね返しをり
石仏のツイート溢れ冬菫

老犬

佐藤　保子（福島）

忘れたわすれた首をふる鳩夏夕焼
この辺で死ぬふりしよか夏の空
どうせどうせ小心者よ百日紅
老犬のふいと見上げる夏の果
すとんと秋すとんすとんと時つもる
亡八よされどされども蓮の花
秋高し鴉の悪事人走らす

私の好きな季語
「すみれ」　植木　國夫

菫程な小さき人に生れたし　　夏目漱石

あれほどの文豪が小さき人に生まれたいとはと訝しむ句でもあるが、そこからいろいろと鑑賞が広がるようだ。菫は可憐で清純な雰囲気をもちながら、その愛らしい姿とは対象的に凛とした力強さもある。そこで作句当時の漱石の心情を思い巡らす解説が多く見受けられる。それはさておき……。

生者こそ行方不明や野のすみれ　　高野ムツオ

除染袋すみれまでもう二メートル　　永瀬十悟

この二句はともに三・一一以後の震災を詠んだ句で、ムツオ先生の句には「行方不明なのは人間の未来そのもの」との自句自解がある（『あの時―俳句が生まれる瞬間』）。あの震災で多くの死者や行方不明者を出したが、生き延びた者が行方不明なのだとの着想は到底私の及ぶところではないが、その取合せとしての菫は、人間界とは異なって優しくも逞しい自然界を象徴する。

十悟さんの句はごく最近まで目にしてきた景である。飯舘村や浜通りの田畑には除染袋がうず高く積まれ、それがどんどん広がっていく。野の草花は押しつぶされそうだ。その景を「すみれまで二メートル」と詠んだのは、可憐な菫が今にも押しつぶされてしまうとの現実感、切迫感を表象する。

人間界の切迫した様、あるいはその対極を、あの可憐で愛らしく、それでいて逞しい自然界を表す菫は、私の好きな季語となった。

前号会報より
この句がよかった　池田義弘

軍服の父ありて我曼珠沙華　　カズオ

ここに海軍の水兵服を着た父と母それに私と弟が写ったセピア色の写真が手元にある。父は軍港のある横須賀で兵役に携わっていた。父の日記に私の生まれた時の様子を感情を交えずに簡潔に記載されていた。その日記から父の思いが立ち上がってきて切なくなったのを思い起こす。子どもは親を選んで生まれてくることが出来ない。しかし子どもの人生はどのような親の元に生まれるかで人生の苦楽が決まる。赤い炎のような曼殊沙華の花に我の今ある存在の不思議を改めて知らされるように思えて魅了される。

盆踊る帰還少なに下駄の音　　江井　芳朗

東日本大震災と原発事故から十一年半となるにも関わらず、未だ避難したままで帰還しない住民が数多くいる。町の復興と活気を取り戻したいとの思いで盆踊りを催したのに踊る人が少なく淋しい思いにさせられる。震災の後遺症は癒えず「下駄の音」の少なさが厳しく悲しい現実をつぶさに物語っている。一日も早い日常に戻る事を切に願う。

アカシアの花調教の馬の艶　　永瀬　十悟

堤防を競走馬の足馴らしをしている様子に出会った事がある。見事に手入れされた馬の毛並みと黒光りするような艶にほれぼれと見入ったのを現前にすることが出来る。折からアカシアの花が咲き誇り、辺り一面に独特の香りを放っている。敏感で緊張感に満ちている馬の生態を捉えて、作者の感性がみずみずしく息づいている一句であろう。

神々を宥めるやうに虫時雨　　櫻井　潤一

人びとに災いと苦しみをもたらす荒ぶる神を宥めるにはお供え物や生け贄をするのが仕来りであった。しかし現代の原子力は人知を越えて巨大なエネルギーとして二十世紀に登場した荒ぶる神である。微小な虫には魂が宿り荒ぶる神々を宥める能力が備わっているのかも知れない。人間おごる事なかれとの意が込められている。

私を変えた一句

ひらひらと月光降りぬ貝割菜

川端茅舎

掲句は「額縁」に入った絵画だ。天から降りてくる光の天使と庭先の蝶の羽のような二枚葉が月の光を浴びている。光の愛撫を受けるかのように。

川端茅舎は、東京日本橋生まれ。画家川端龍子は兄。一旦は洋画家を志し岸田劉生に師事するが病のため断念。

俳句は「内」から詠む、という。「内」から詠むためには、まず対象のふところに飛びこんで、「対象の身」となり「対象の心」を心としてはじめて可能という。この時、大事な基本は「作者の対象に対する深い愛情ではないか」ともいう。

句の客観上の真実と自分の想いの中の真実を重ね合わせて、客観描写と主情を言葉をもって表現する形式、このモノローグとダイアローグの対立。二律背反の中でもがき続け、なかなか、自分の句、自分の素の句ができずに居る現在である。

二十代後半から俳句を始め、いつまでもゆらゆらと、ふらふらと揺らいでいる。

清水　茉紀（福島）

命あらば生きねばならず雀の子

滝沢幸助

元衆議院議員滝沢幸助先生の句です。地元では書家、歌人、俳人、詩人として師と仰がれており父も懇意にしていただいておりました。

雀の子を我が子の姿と重ね合わせ、これ程の辛酸を嘗める人生ならば、いっそ生まれてこなかった方が良かったかという親心が垣間見えます。しかしながら、どんな小さな命にも命は宿っていると詠んでおります。健気に餌を啄ばむ姿に、強く生きよという祈りが込められています。

宇宙には意志があります。この意志を実現させる為に生まれてきたのが人間です。花鳥風月悉く宇宙の意志が宿っています。この宇宙の意志を読み取る（詠みとる）のが俳人の役割でありましょう。

吾が父の無月の如くありにけり　潤一

櫻井　潤一（会津若松）

〈〈　編集後記　〉〉

皆様のご協力のもと、今年一回目の会報をめでたく発行することができました。会報について、ご意見、ご提案いただければ幸いです。（E）

県会員作品一句鑑賞

三月の福島の季語みな被曝

鈴木　満喜子

この句は福島市民俳句大会の五十周年記念入賞の秀句です。この句の「季語みな被曝」の大胆な切り口に脱帽でした。そう福島の万物が被曝したという絶望感までも。あの事故から十一年、新たな問題を抱えながらも、福島はこの逆境を生きています。この句により、現実を知り強く進む事を知ったように思います。傷ついた福島への心からのエールです。

（丹羽　裕子・福島）

群れること拒否して揺れる白蒲公英

宇川　啓子

私が石川県金沢市へ避難した２０１１年、避難先の住宅の片隅で白たんぽぽを目にし、今や特別の花に。掲句は現代俳句年鑑２０２３から。「れる」の繰り返しが何とも心地よく、一方「拒否」に非常に強い意志が現れている。

白蒲公英は黄色数多の中の少数派。少数派ながらも「吾ここに在り」と白のまま。黄蒲公英に囲まれ、風に揺られ、時には心が折れそうになることもあろう。だが「私は白！」を貫く。お手本だ。

（浅田正文・石川県金沢市）